

体操人生回想録 ～退職記念講演より～

History of my Gymnastics life

伊藤 勝三

Katsumi ITO

まえがき

今回、本研究誌の担当責任者より課題を頂き、退職講演の際にふれた、特に戦後の日本のスポーツがどのような復活の道をたどってきたのかを体操競技（当時器械体操）を中心に、また自身の体験を通して書き残しておくことにした。

改めて言うまでもないが、戦後の日本は、経済的なことばかりではなく、食糧事情等も創造を絶するほど悪かった。敗戦で打ちひしがれ泥沼のような生活の中で、明るいスポーツの話題は、日本人の心の寂しさを取り戻すための一筋の光でもあり、全国民に希望と勇気を与えるための大きな役割を果たしてきた。

当時は敗戦の惨めさに加え、とてもそのような事など考える余裕すらない頃、多くの人達や選手達が幾多の苦難をのり越えながら、再建へと燃えあがっていった。今回は小生の故郷である島根の体操史を通して様々な出来事や苦難の足跡をたどってみたい。島根体操を語らずして日本の体操史は語れないと思うからである。

1. 島根は日本体操競技の草分け的な地であった

今回は学術的な本研究誌の紙面をかりて、島根県の体操小史を紹介することにした。島根県の体

操に関する歴史はあまり知られていないが、その歴史は昭和6年に誕生して以来70数年、戦前から戦後にかけて、偉大なる先輩達によって体操界の組織づくりと選手育成から始まり、日本を代表する多くの名選手を輩出してきた。

戦後間もない名選手と言えば、昭和27年のヘルシンキオリンピックにおいては、5人の選手団中、竹本正男、故上迫忠夫選手の2名を日本代表選手として送り出し、その目覚ましい活躍ぶりは日本体操競技史上に大きな実績を残した。

ちなみに体操の他では、「暁の超特急」といわれた短距離走の故吉岡隆徳はあまりにも有名である。彼は昭和57年、故郷島根県のくにびき国体のアドバイザーコーチを最後にこの世を去った。

このような片田舎からどうしてこのような名選手が誕生したのかと不思議に思う人もいると思うが、これは本人の努力は言うまでもなく、そこには必然的と言って良いほど、多くの人達が長年に渡って築き上げてきた歴史や伝統が存在する。

日本の体操を導いてきたといえる島根県の歴史を知っていただくことも参考になるのではないかと思い、私自身の少年時代の体験等も含め、その一端を書いてみたい。

2. 日本体操協会の元祖創立者は島根の岸清一であった。



写真1 ブランテージIOC委員長は東京オリンピック直前の39年9月30日岸清一博士の銅像に花を捧げる
島根県体育史より

ここで、島根体操の歴史と云ったら、第一に近代スポーツの父と言われた、岸清一をあげなければならぬ(写真1参照)

彼は慶応3年(1867年)7月4日、松江市雑賀町に生まれ、自らも剣道、陸上競技、漕艇等のスポーツをたしなみ、明治22年東京大学法科を卒業後、明治末期から大正、昭和初期にかけ、わが国の体育スポーツ界の発展のために尽くした功績は偉大である。

昭和7年7月、第10回ロサンゼルスオリンピック大会には、役員69名、選手131名の大選手団を率いて参加し大なる実績を上げた。その後、彼は第12回国際オリンピック大会を東京に誘致するため、対外交渉に当たっていたが、その実現を見ることなく昭和8年10月29日、風邪がもとで肺炎、喘息に罹り、心臓麻痺を併発し、「参った」の一言を残して安らかに息をひきとった。享年67才であった。

郷土を深く愛し、島根の体育のみならず、わが国のスポーツ振興を願っていた彼は没後、彼の意志により、大日本体育協会へ体育館建設基金とし

て80万円を寄付した。当時にすれば莫大な金額である。その後、岸記念体育館が建設され、現在の日本体育協会として今に受けつがれている。

このような偉大な先輩達に、同県人としての誇りを感じている。

現在の体操協会は昭和5年4月13日、全日本体操連盟の名称で体育協会の中に創立され、その後日本体操協会へと改称されている。

3. 島根体操の生みの親と育ての父

歴史と伝統に輝く「島根体操」は昭和6年2月20日、日本体操連盟が産声をあげて10ヶ月後に、生みの親と言われる故園山亀蔵(当時、島根県体操連盟会長・昭和7年ロサンゼルスオリンピックに視察団の一員として参加)の手で創設された。知る人ぞ知る園山亀蔵は昭和13年、全日本女子体操選手権大会で優勝した園山綾子(写真2参照)と超一流の漫画家で有名な故園山俊二の父である。彼は当時の女性の運動着としては足首まである「モンペ」姿の時代に、娘に「ブルマー」を着用させて演技を行わせたため、大衆の面前に娘の太ももを晒したとして当時の報道関係にはひどく叩かれ、大衆からも非難ごうごうであった。(写真2参照)

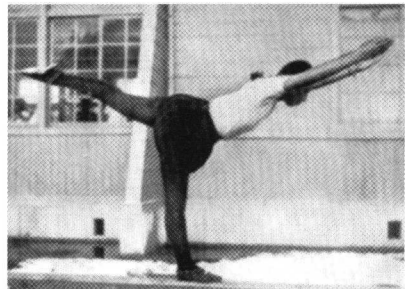


写真2 第1回全日本女子体操選手権大会で優勝した園山綾子選手の平均台の演技(昭和13年) 島根県体育史より

彼はそんなことはものともせず、日本スポーツ界の将来を考え、一度決心すれば誰が何と言おうと決して自分を曲げない強い意志の人であった。

時を同じくして、育ての父と言われた故横田勝之助が浜田中学に赴任し、その両地区で島根体操

が温かく育てられてきた。そして、昭和6年と7年には既に体操祭を実施し、昭和8年には第1回鳥根県中等学校体操選手権大会が開催され、鳥根県は体操の草分けの地として黎明期に君臨して来た。

昭和9年、第四回全日本中等学校体操選手権大会が東京の日比谷公園において開催され、その大会において何と浜田中学は団体3位の成績を勝ちとった。この出来事は全国的に鳥根県の知名度をあげることになりその後、鳥根体操を育てあげていくための大きな原動力になった。

遙か遠くの東京の地で行われる大会に参加することは当時としては大変なことで、様々な困難があったと聞いている。彼をその様に駆りたてたのは、彼の体操に対する情熱はもちろんだが、選手達の日頃の努力に報いてやりたかったと書き残されている。

当時の良きライバルとして秋田能代中学があるが、追いつけ追い越せの努力が積み重ねられ、鳥根出身の竹本正夫、上迫忠男の両国際選手を筆頭に、国内のトップクラス選手達が続々と誕生していくことになる。

小生も半農半漁の地で美しい景色だけが取り得の小さな村に生まれ、器械体操をパートナーに少年時代を過ごした。その後、日本の代表選手に選ばれ光栄を得たことは、少年時代それなりの環境や条件に恵まれていたこと、特に当時の旧制浜田中学校の体操部は名門中の名門で、素晴らしい恩師や先輩達に恵まれ、基礎作りになったことは言うまでもない。

4. 名門体操部に籍を置くと言うことは・・・

1948年(昭和23)当時、先輩で有名選手の演技会を見学する機会があり、自分の身体そのもので表現して見せるその演技の美しさに感銘を受けて体操をやることを決意した。中学3年生時に体操部入部の許可を得るため、主将の所に何度も足を運んだ。名門が故に簡単には許可がもらえず、再三お願いにあがり熱意を示した。約1ヶ月後やっと入部が認められ、故畑岡正夫先生(昭16第12回

明治神宮大会・全日本中学校体操選手権大会優勝)の指導を受けることになる。

1949年(昭和24)新制県立浜田高校に入学後、大賀義徳先生(昭和9・日比谷公園大草地会場、第4回全日本中学校体操選手権大会出場)に厳しい根性体操の指導を受ける。

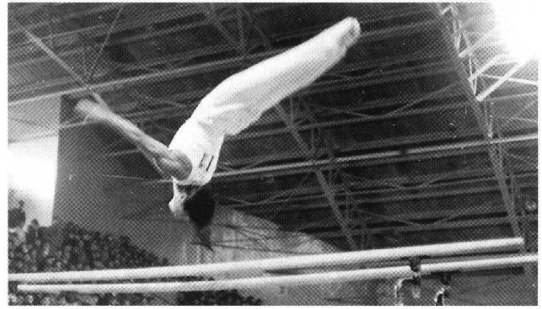


写真3 昭29年平行棒の後方宙返り(郷土資料館・著者)

1952年(昭27)日本体育大学に進学し竹本正男先生の指導を仰ぎながら、1958年(昭33)スペインバルセロナ国際体操競技選手権大会および第14回世界体操競技選手権大会に日本代表選手として出場する機会を得る。

5. 柴田サーカスに教えを乞う選手達

昭和23年頃の体操の技術や練習法はどのようであったかふり返ってみることにする。

アマチュアの体操選手達がプロのサーカスの人に教えを乞う、そんな馬鹿なことがと失笑をかうかも知れないが、当時は浜田中学出身のトップクラスの選手達が、里帰りをかねて我々体操部と合同の練習会を開いてくれた時のことである。当時のバック転(後方倒立回転)は、後方に高く遠くへ飛ぶのが良いとされ、速い連続のバック転等は考えていなかった。たまたま浜田市に柴田サーカスが興業にきており、出し物の中に凄く速いバック転の連続をやっているとのうわさを聞きつけ、選手達はその技術を盗みとるため大勢で見物にでかけていった。その技は明らかに我々より数段上であった。それは人間がやっと一人乗れるぐらいのテーブルの上で、素晴らしく速いバック転の連続

をやってみせたのだ。全員で目を凝らしてその技をみたが、どうしてもそのテクニックがわからない。いっそ体育館にきて貰い、素直に教えて頂こうということになり来校をお願いした。彼は来校の際に例のテーブルを持参しその技術を見せてくれたが、実はそのテーブルにあの技術の秘密があったのだ。なんとその机の四脚が前後に動くようになっており、バック転で蹴った際、体の重心が前方へ移動するといった仕組みになっており、つまりテーブルの前後の揺れを利用して同じ場所でバック転の連続回転ができる仕組みになっていたのだ。

体操競技（器械体操）では、同位置でバック転をする必要はなく、椅子に腰掛け前屈したような姿勢から後方へけるといった技術に変化していった。低い姿勢からバック転は回転半径も小さく必然的に後方へ速く叩きつけるようなバック転になっていったわけである。現在「ゆか運動」で使用されている速いバック転からの後方宙返りには、この様な隠れたエピソードがあったわけである。

6. 岩場や松林は最高のトレーニング場

とにかく当時の施設や器械・器具等は現在では考えられない程お粗末なもので、近くの鉄工所等で作らせたものであった。しかも特殊なものだけに数的にも少なく、設置場所もごくわずかであった。練習は日曜、祭日、休暇中、片道2時間以上かけて学校まで通った。小生自身も朝は5時30分に家を出て、帰宅は10時30分が毎日の日課であった。何かもっと効率のよい方法を考える必要があった。身近にある自然のものを利用した練習法といえばやや大袈裟になるが、私にとってこれに気づいたのは大変大きな収穫であった。岩場から海中に向かっての「前方宙返り」や「後方宙返り」からの変化技の練習法は何よりも安全でかなり効果があった。また、流れ着いた畳やゴザを固定することで着地の感覚をつかむのは十分だった。松林では麦藁干しの竹竿に着地用の米藁や麦藁がふんだんにあった。肩幅位の適当な四本の木を見つ

け縄をなつては木に結びつけ平行棒の完成である。本練習場の硬いばねの平行棒より遥かに弾力があり、しかも砂地に麦藁マットで安全でもあり至れり尽くせりである。

もっともよかったのは練習場まで1分少々で到着できることである。技の習得も他の選手に比べ、はるかに多くなり、県内や県外のブロック大会などにも、トップの成績を得ることにつながった。

7. マスコミが当時のスポーツを支えてくれた

地区の大会で、新記録の得点をあげ全種目優勝の記事が新聞に大きくとりあげられた。

とびあがるほど嬉しかった。ラジオでも人物当てのクイズ番組にもとりあげられた。映画館では劇映画の前にスポーツニュースとして放映された。

当時の生徒たちは、映画館への出入りは校則で禁止されており停学になりかねなかった。写真でしか見ることができなかった時代に、自分の動いている画像は、何がなんでも見たかった。人目を忍んで恐る恐る映画館に入った。テレビもビデオもない時代、スクリーンに映る自分の演技は、めまいがするほど強烈で興奮を覚えた。当然、初めてみる劇映画にも感動した。あの日から私の人生は大きく変わってきた。明るく日登校したらなぜか？バレていた。監督に呼ばれ、今日の教員会議にこの問題がだされるはずだから停学を覚悟するように言われた。第6回広島国体を間近に控え、団体上位入賞には自信があったので残念に思った。くやしかった。部員の皆に申し訳ないと思った。教員会議の結果は覚悟をして待っていたがその通達はなく、そのまま国体に出場し、成績は団体で3位入賞となった。

反面新聞には“小生の徒手体操の演技を觀賞される高松の宮様”の写真が大きく記事になり一躍有名になった。一般の人たちにも自分を含めた体操そのものが理解されるようになった。その後大学に入るために東京に行くことになるが“停学”の問題はどうなったのか、今だにその通達はない。

8. 命がけの闇夜の実験

体操の選手たちが演技を行う際に視覚神経や聴覚神経はどれくらい演技に関与しているか、どうにもはっきりしない、事実「あん馬」の演技を見てもわかるように入り技以外は着地にいたるまで、一流選手でも馬上やポメル（握手）をいちいち見て演技をしている人はいない、体操選手の本質である熟練性や芸術性はこんな所に問題が潜んでいるのかも知れない。いつものように体操仲間が集まってわいわいしゃべっているうちに、いっそ実験してみたらと言うことになり、言いだしつべの小生自身がその実験台に立つことになった。

真夜中に、中庭に設置してある鉄棒を利用して自信満々の規定種目（予選で行う同じ技の種目構成）に挑戦することになった。真っ暗闇の中で最初は不安もあったが鉄棒にぶら下がり2、3回練習を繰り返していると思っていたほど恐怖感がなく、実験の本番では入り技から終末技の着地まで殆ど問題なくこなすことができた。

私の個人的な意見を言わせて貰うと、どうも初心者の練習段階では、技の内容によっては感覚器にやや頼る部分があるように思われるが、技が殆ど完成間近の状態になった時点では、耳に関しては、機械のきしむ音や触れる音で技のリズム感を捕らえようとすることはありそうだが、目はあまり重要な役割を持っていないようだ。むしろ一連の動作として反射的に動きが続いているようである。それならいっそタオルで目隠しをしてやってみたら言うことになったが、試合を間近に控えているのでやめておこうと言うことになり、その後実験はそのままになっている。

9. 倒立論争

ある研究誌に“倒立の姿勢について”投稿したことがある。当時の美しいとされていた倒立姿勢は日本刀をイメージして、反り身の姿勢が流行の大半を占めていた。確かに片手倒立や逆十字懸垂（写真5参照）の静止技の場合には、安定性や美的にも納得する部分もあるが、次にくる大技など

を行う場合の雄大性を考えるなら、回転半径の大きな「直立姿勢」の倒立がよいに決まっている。



写真4 昭和29年 鉄棒の車輪宙返り（郷土資料館 著者）

倒立2通りの提唱に当時の大物達から相当の反論があった。採点の関係もあり、それを実証するのに苦労があったが現在では勿論、その「直立姿勢」の倒立が主流を成している。倒立技のひとつをとりあげても、このように未知で苦労の時代があった。

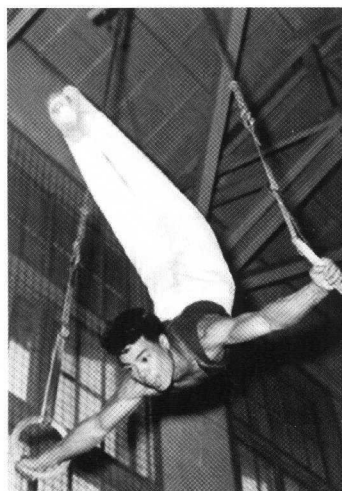


写真5 昭和34年つり輪の逆十字懸垂（郷土資料館 著者）

あとがきにかえて

前回シドニーで行われたオリンピック大会においては、少子化の進む中でスポーツマンを養成する困難さはあるものの、日本はかつてない不振に終わり、歴史ある日本体操の復活を誰もが願うところであった。特にジムナスト教育の必要性は誰もが感じ大変関心が深まっているところであった。

そのような中で、今回はオリンピック発祥の地アテネにおいて、男子体操団体は劇的な逆転の末、見事に感動の優勝を成し遂げたことは、なんとモントリオールから28年ぶりの金メダルをつかんだことになる。これは、とりもなをさずスポーツクラブにおける献身的なジュニア教育の努力が見事に功を奏したものと見える。

しかし、喜んでばかりはいられない。4年後の中国で開催されるオリンピックにおいて同様な結果が期待できるとは限らない。再び優勝を勝ち取るためのキーポイントは、なんと言っても今後の選手の強化にある。また国内外における情熱のある優秀な指導者の配置と情報の収集である。そして他国を超えるさらなる研究と努力が重要になってくる。

本研究誌等を通して過去の歴史を知ることにも意義なことであり、将来に向かって育ちゆく青少年のよき参考になり、新たな一歩を踏みだすきっかけになれば幸いである。

以上

参考文献

- 1972 体操日本栄光の物語 日本体操協会 小野泰男
 1981 島根の体操50年 島根県体操協会 報光社
 1983 くにびき国体記念誌 島根県体操協会 田口印刷
 1983 くにびき国体に挑んだ体操の仲間たち 渡辺悦男
 1983 浜高体操部50年の歩み 山口盛夫 益田タイプ
 1989 島根の体操史 島根県体育協会 柏木印刷
 1994 浜田高等学校百年史 県立浜田高等学校 柏木印刷
 2002 体操島根70年の競技史 大屋俊郎 樋野俊晴
 松陽印刷所
 掲載写真 島根県郷土資料館保存用より

著者略歴 (島根県出身)

元国土館大学体育学部スポーツ医科学科教授
 元国土館大学・スポーツ科学学会理事長
 元日本体操競技・器械運動研究会会長

主な競技歴 (1958~1959)

- バルセロナ国際体操競技選手権大会
 個人総合(胴)鉄棒(金)平行棒(金)つり輪(胴)
 スtockホルム国際体操競技選手権大会
 個人総合(銀)
 ヘルシンキ国際体操競技選手権大会
 個人総合(銀)
 14回モスクワ世界体操競技選手権大会
 団体総合(銀)
 第4回全日本社会人体操競技選手権大会
 個人総合(金)鉄棒(金)あん馬(金)平行棒・跳馬(銀)